



秋

◆初秋と中秋…………… (秋のはじめと、中ごろのことです)

秋は鳴く虫から始まります。



エンマコオロギ



8月～11月、29～35mm。地面の上にいるコオロギの中では、ずば抜けて大きいので、すぐわかります。たいへんよい声で「コロコロ・リー」と鳴き、スズムシやマツムシにおとりません。あまり大切にされないのは、たくさんいるからでしょう。名前についているエンマは、顔が地獄(じごく)の大王「えんまさま」に似(に)ているからとのこと。

秋は赤とんぼの季節でもあります。

ナツアカネ



6月～12月、33～41mm。アキアカネにくらべ、少し小ぶりです。名前にナツがついていますが、秋に多いです。オスは顔も含めて全身が真っ赤になります。メスは赤みがうすいです。(写真はオス)

アキアカネ



6月～11月、33～46mm。代表的な赤とんぼです。初夏に少しの間現れます。すぐに高原(こうげん)に移動し、暑い真夏は涼(すず)しい山地です。そして、10月ごろに低地にやってきます。メスは赤みがうすいです。(写真はオス)

リスアカネ



6月～11月、31～46mm。前ばねと後ばねの先に黒っぽい色の部分がありますので、見分けやすいです。メスは赤みがうすいです。名前についているリスは、スイスのトンボ学者フリードリッヒ・リス氏にちなみます。(写真はオス)

田んぼではコバネイナゴがたくさん発生します。

コバネイナゴ



8月～11月、オス16～33mm、メス18～40mm。コバネイナゴは日本の昆虫食の代表的なもので、広い地域(ちいき)で食用にされ、佃煮(つくだに)がよく知られています。かつてイナゴはイネの害虫とされ、農薬(のうやく)がまかれてめっきり減りましたが、最近はかなり増えてきて、ならやまでもたくさん見られるようになっていきます。

花にはツマグロヒョウモン、ヒメアカタテハ、キタテハ、アサギマダラなどがやってきます。

ツマグロヒョウモン



4月～11月、27～38mm。
名前についているツマグロとは、前ばねの先が黒っぽいということです。ただし黒い部分のあるのはメスだけで、オスには黒い部分がありません。幼虫の食べ物はスミレ類です。このチョウはもともと南方系です。近畿地方でも、めずらしいチョウでしたが、今では関東地方まで広がりました。

ヒメアカタテハ



3月～11月、25～33mm。
アカタテハによく似ていますが、少し小ぶりです。幼虫の食べ物はヨモギなどキク科植物です。初冬まで見られますが、成虫での越冬はできないようです。

キタテハ



このチョウは早春のところで説明しました。秋はよく活動する時期で、よく見かけます。写真は秋型で、色は濃い茶色、はねのふちの切れ込みは深いです。秋型は成虫で越冬します。

アサギマダラ



43～65mm、はねを開くと100mmほどになり、大型の美しいチョウです。日本で唯一「渡り」をするチョウとして知られ、本州から沖縄などの南の島々まで、長距離(ちょうきょり)を移動(いどう)します。「渡り」が初めて確認されたのは1981年。鹿児島県の種子島から飛びたったチョウが、遠く離れた福島県と三重県で見つかっています。ならやまには10月初旬に、植えてあるフジバカマの花にやってきます。南への渡りの途中(とちゅう)です。好みの花はフジバカマ、野の花ではヒヨドリバナです。

「渡り」の最長は、なんと1,680kmです。



神秘と謎につつまれた“昆虫の渡り”

昆虫も渡り鳥のように、長い距離を移動するものがあります。小さな体からは想像(そうぞう)もできない、夢のようなことです。渡りの出発地から目的地まで導いてくれるのは、「日が射す方角」つまり太陽のようです。曇りの日でも方向をまちがえないのは、謎(なぞ)でした。最近、地球の磁場(じば＝磁力が影響する範囲)を利用しているのではないかと分かるようになりました。

◆晩秋…………… (木々の葉が赤や黄色に色づく秋の終わりごろです)

晩秋になると、アカタテハ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミ、クロコノマチョウなどが、花以外の場所でよく見られます。これらのチョウは、すべて成虫で越冬するチョウですから、越冬場所をさがしていることもあると思います。

クロコノマチョウは、はねのうらが枯れ葉のような色をしており、そのことを知っているのか、うす暗い林の中の落ち葉の上で静かに止まっていることが多いので、なかなか見つかりません。

アカタテハ



早春のところで説明しましたが、晩秋にもよく活動します。成虫で越冬します。

ウラギンシジミ



早春のところで説明しました。成虫で越冬しますが、おおかたはメスのようです。オスは越冬できないという専門家(せんもんか)もいます。越冬の姿は、木の葉のうらにつかまって、さかさ(逆さ)になっています。

ムラサキシジミ



早春のところで説明しましたが、成虫で越冬します。真冬でも暖かい日には出てきて、日なたぼっこをしていることがあります。

クロコノマチョウ



3月～11月、32～45mm。中型で、色や形が枯れ葉そっくりなチョウです。うす暗いところを好み、とまるときも自分の色が、まわりの環境(かんきょう)にまぎれるような枯葉の上や、かくれやすい場所をえらんでいるようです。静かに止まると、見つからないことに自信(じしん)があるのでしょうか。人が近づいても、まったく動きません。まるで忍者(にんじゃ)のようです。

樹液や落ちた果物(くだもの)の汁を吸います。幼虫はイネ科の植物を食べます。最近増えたチョウです。



「冬眠」とは、気温が低く食物も乏しい冬は、多くの動物たちにとって、正常な生活を営(いとな)むのが難しい季節です。とくに変温動物の場合には、体温が外気温に並行して低下し、ある限界以下になると、体を動かすことも発育することもできなくなってしまいます。したがって眠っているかのように静止して、冬を越すのがふつうです。このような状態を一般に冬眠と呼んでいます。